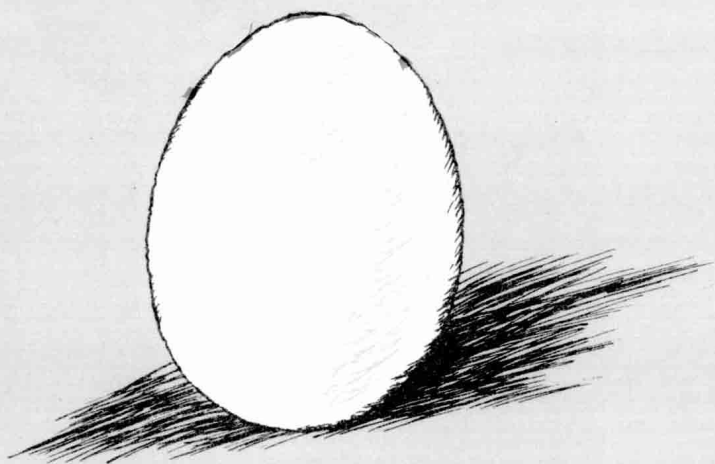


オムライスは好き？

田辺聖子

オムライスは好き？



田辺聖子

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

小説集 オムライスはお好き？

昭和55年6月25日 初版1刷発行

定価 980 円

著 者 田 辺 聖 子

発 行 者 小 保 方 宇 三 郎

印 刷 者 堀 内 俊 一

東京都千代田区三崎町2-18-11

堀 内 印 刷

発 行 所

東京都文京区音羽2
振替 東京 6-115347

株式
会社
電話 東京 (942) 2241 (代)

光 文 社

落丁本・乱丁本は本社でお取替いたします。

(複本製本)

© Seiko Tanabe 1980

(分)0-0-93(製)92065(出)2271 (0)

Printed in Japan

目次

かたつむり

5

結婚しない男

39

わすれ貝

75

ノコギリ足

109

渡り鳥おやじ

137

種貸さんたねかし

159

オムライスはお好き？

183

裴
幀
矢
吹
申
彦

オムライスはお好き？

田 辺 聖 子

か
た
つ
む
り

都築は会社にいるあいだも、家のことを考えると、イソイソする。あるいは、ふかい満足をおぼえたりする。

楽しみができた。嬉しくて仕方ない。

家の中の、家族関係ではない。新妻をもらったとか、子供ができたとかいうことではない。

中身ではなく、イレモノなのだ。

家を改築したのだ。新築とっていいくらい、美事に作りかえてしまった。塀も門も、あたらしくした。

青瓦の二階建ての豪壮なものである（と、都築は思っている）。

尤もこのあたり、わりによい住宅地で、どちらを向いてもすばらしい新築の邸宅が並んでいるから、都築の豪邸も目立たない。いや、これでやっと目立たなくなった。以前はみすばらしく目立っていたのだ。

都築は大げさというと、生きる希望が湧いてきた気がするのだ。

男子四十四歳にして、人を招いても恥ずかしからぬ家を建てた。いや、そういう体裁の見栄もあるが、しかし都築は、塀や門のある「豪邸」がいとしいのだ。わが子のように可愛い。

少年のころから、郊外の「門のある、洋館みたいな家」にあこがれていたが、ついにその夢が実現したのだ。

都築はわりに、家のことをゴタゴタするのが好きである。触ったりみがいたりが好きなのだ。巢をつくろうのが好き、というのは女性的なのかもしれない。

木の香のぶんぶん匂う、さわやかな居間で、じーっとまわりを見廻したり、門の前に立って朝日に輝く威容をふり仰いだりしていると、うれしくて涙が出てくる。

都築は、城主になったのだ。

全く、ここまでくるのは大変なことであった。以前の家は交番みたいに小さく、かなり傷んでいた。

十年ほど前、大阪府の分譲の土地が当たって驚喜したが、土地を買うのに精一ぱい。家はや々と建てた狭いものである。それでも、そのときの都築には金殿玉楼に思えた。ただ金をケチったので門は手づくりで庭も掘^ほったらかしであった。とてもそこまで手がまわらなかった。

それに十年前は、世の中もまだそれほど派手でなくて、まわりも、ぼつぼつと空地があり、ペンペン草など生えていた。

十年間に、このへんもうんと変貌した。都心まで電車が走り、駅前にデパートの出店ができたりとすると、たちまち空地には「豪邸」がたち並び、都築は目を奪われて、一軒一軒をじーっと見ている。

男には、家に興味のない奴がいる、と知ったのはそのころである。

都築は会社の同僚の矢代^{やしろ}が家に来たとき、駅まで送りがてら、わざわざ遠まわりして、新築の

豪邸のたち並ぶ通りへ連れていった。

「どや、あの家。スペイン風やろ。あれな、中庭つくつとんねん。かなり凝つとるで。専門家に作らしてんな。外灯も氣イ利^きいてるやろ」といった。

矢代は

「うーん」

と氣がなさそうにいつて漫然と見ている。

「ここ、ここ。この家、ごっついで」

と都築は声色もかわらんばかりに、向かいの角へひっぱってゆく。

本格的日本建築の、これは文字通り豪邸である。何ごとのおわしますかは知らねども、という感じで、門の内は奥ふかく霞にまぎれ、生垣^{いけがき}が長くつづき、門内に植えられた竹がそよいでいた。りする。本式の日本家屋というのは格調があつて、新建材の洋館のようにうすっぺらなものではない。

「総ヒノキや、いう話やで。坪何ぼついとんのかなあ。食品会社の社長や、いう話やけど、そのまま、料理旅館にしてもいけそうやなあ」

都築は昂奮してしゃべり、矢代は氣のいい男なので、どうかして都築と同質の感動を共有したいと努力する風であつたが、とうとういい出した。

「オレなあ、あんまり、家に趣味ないねん、ようわからんのやなあ」

矢代は、住む所はどんなだろうと氣にならぬという。

以前は小さいアパートにお袋と弟妹が来て八人で住んでいたことがあった。矢代の妻は家を建てたがるが、矢代自身はどっちでもいいそうである。

彼にしてみれば、スペイン風の、総ヒノキのと、他人の家に昂奮している都築が、解せないものであるらしかった。

都築はまた、家に興味の無い矢代を、ふしぎに思う。いつも交番のごときわが家に、あじけない思いをしているので、ヒトの家が目についてしかたないのだ。

いつかは建てかえたいと、その夢をじっと胸にたたためていた。

ただ、具合のいいのは、家に関しては妻と意見が一致する。

都築は妻の保子やすことは見合い結婚だが、必ずしも仲がよいわけではない。遠縁というので持つてこられた縁談である。都築は妻の勝ち気さや、負けずぎらいや、いっこくで偏狭な、怒りっぽい性格を、あきたりなく思っている。

昔は華々しいケンカをした。

何べん、別れようかと思つたかもしれないが、土地を買つたり、子供が二人出来たりしているうちに十六、七年たち、いまではケンカも邪魔くさくなつてきて、折れ合うようになった。

子供の成績がわるかつたりすると、都築は妻の責任だといひ、妻は都築の責任だといひつてわたる合うこともあるが、まあ、何となく過ごしている。

それに、仕事が忙しくなつた。都築は大阪南区の機械会社の販売促進課長である。毎晩、帰宅はおそくて、朝は新聞を読みながら食事をするから、妻とゆっくり話し合うこともない。ケンカのたねもないわけである。

ところが、その妻と、意見が一致することを発見したのだ。

上の息子が中学へ入るについて、都築は教育大の附属中学へ入れたいと思う。妻も、そう思っている。

その次に、ついては、家をこの際、建てかえたい、と妻はいった。都築も同意した。

「たべるもん着るもんは少々粗末でも、わからへんのですよ。でも住んでる家はチャンとしたものでないと、肩身狭いわよ」

と妻の保子は主張した。

保子はキンキン声を張りあげる、瘦せて小柄な女である。若いころ見合いをしたときは、小柄でほっそりしていたので、都築にはいじらしい、いたいたしい、あえかな少女に見えたのだ。

本当に、指など、ツクリモノの人形のように小さく美しかった。

それが今では「あえか」どころか針金細工といった女になっている。骨っぽくて強靱である。自分から折れる、下手に出る、といったしおらしいところは微塵もない。キンキン声でとつちめる。

都築は、針金妻にあきらめて十なん年、暮らしているのである。女は見かけだけではあかんなあ、変貌する、いうのを忘れたらあかんなあ、とつくづく思うわけだ。この点については矢代も同感であって、

「せやな。女は変わるなあ。そやけどどうやろ、変わる、というより本封がえり、いうようなもんとちゃうやろか。地金が出てくんねんで」といつていた。

都築が十六、七年昔、何という小さく美しい指だろうと思った保子の指は、いまや小さいながらに強く逞しそうなになった。事実、保子は指が小さいのに、指におそろしい力がある。罐詰を開ける、フタをこじあける、押しピンを押す、そういう力がじつに強い。

（あの指で首絞められたらイチコロやなあ）

と都築が内心、思ったりするくらいであるのだ。

日常の暮らしでは必ずしも仲がよいともいえない針金妻と、趣味が合うのは、子供の教育や、家の改築よりも、実に処世の根本であつたらしい。

つまり二人とも、衣食住のうち、「住」に重点をおきたい方なのだ。

「なんだって家ですよ、なんぼお金があつたって、安アパートに住んでるようなん、下賤の人の趣味やわ。家は知識階級の象徴やわ」

「そや」

知識階級の象徴はおそろしいが、都築は、家に憧れているから、賛成せざるを得ない。

都築は見栄っぱりである。

そこも似ている。

子供はエリート学校へ入れ、家は豪邸をたてたい。

「まあ、パパの服はサラリーマンの商売道具やから、ちゃんとしたもんでないとあかんけど、あたしや子供は普通でええわ。あたし既製服で間に合うし、たかい服なんか、よけいなことやわ」「そやそや」

「たべものなんか、栄養さえとれたらええねんわ。お漬け物でも結構、おいしいもん」

「そやそや」

何でこない話合うねん。しかし、しかたない。

都築も、そう思ってるのだ。

戦後の窮乏時代が骨身に沁^しみてる世代だから、たべものに贅沢はしない。会社で接待でもあるときは別だが、わりに粗食でも平気である。（煙草はのむが、酒はやらない）

この点も妻と似ている。

妻は奈良の旧家の娘で、食べものに奢^{おご}らない。

実家は、土豪の城のように細い堀をめぐらし、長い塀がつづいて、敷地内には、森の中に点々と建物が存在する、というような物々しい家である。都築が訪れたとき、妻の兄が次々に雨戸を繰^くって明かりを入れてくれたが、それだけで三十分も掛かってしまった。父親は死んでいるので、義兄が当主である。

「この燈籠はもと薬師寺にあった」

と義兄は庭の変哲もない燈籠を指し、

「これが白隠禅師の書」

と床の間を指し、

「こんど〇〇デパートにたのまれて古伊萬里を二、三十出さにゃならん。展覧会いうと借りにく
るので煩^{わづ}そうてな」

義兄の部屋にはごろごろと由緒ありげな壺や皿がころがっており、蔵の骨董の目録をつくるのに、もう何年も掛かっているそうである。山林もちで、べつに仕事とてなく、祖先の財産を守る

のが仕事であるらしかった。

昼になって義兄は親切に、

「食べていきなはれ」

とすすめてくれ、つい腰をおちつけていると、大和名物の茶粥がゆが出た。この家では昼も粥らしい。

オカズは、拇指おやゆびのあたまほどの、ほんのちよっぴりのからし菜のつけものに、そうめんの入ったうすい味噌汁で、都築はオナカがだぶだぶしてこまった。この義兄も慶応ぐらい出た男なのだが、奈良の田舎へひっこむと、甚平じんぺいにステテコをはいて、先祖の道具の塵をふいて管理し、美味うまいそうに茶粥をすすめるだけで泰平楽な顔をしているのである。

弟妹が多いせいか、都築と結婚したときもそんなに物々しい式ではなく、簡便にすませ、妻はさしたる持参金もなく、質素な茶粥精神だけを持ってきたらしい。

妻は、都築が夕食をたべない日など、子供たちにハウレン草のおひたしだけで、食事をすませたりしている。

そうして金にこまかい。

都築は妻の勤儉ぶりはみとめている。保子は結婚のとき貰った財産に、勤儉力行してたくわえた貯金を加え、土地を買ったのである。

小さい家で暮らしているあいだに、子供も二人になり、家は古びてきたなくなってしまった。一昨年ごろから、保子はまたまた、次の目標をたてた。

改築して二階をつけよう、というのだ。